

研究ノート

G.B.ショーの*The Apple Cart*をめぐって — 自由な言論はリンゴの荷車をひっくり返すのか? —

近 藤 裕 子

1. はじめに
2. マグナス王の手腕
3. 民主主義とは
4. おわりに

1. はじめに

2014年11月25日付のイギリスの日刊紙*i*にチャールズ皇太子 (Charles, Prince of Wales, 1948-) の手紙公刊差し止めをめぐる記事が掲載された。その中に皇太子のロビー活動について以下の記述がなされている。

The heir to the throne famously holds his views on issues from the environment and organic farming to architecture and complementary medicine with an outspoken passion that contrasts with his mother's constitutional reticence. A former aide said in 2006 that the Prince saw himself as a "dissident" swimming against the political tide and he was widely reported to have made clear his concerns at measures including the Human Rights Act and the ban on fox hunting.¹⁾

将来、チャールズ3世となられる皇太子の、自分の意見をしっかり示したいという姿勢は、イギリスの戯曲作品に登場する、ある国王の姿を思い起こさせる。2014年に生誕450年を迎えたシェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) はその史劇の中でさまざまな国王を描いた。賢明な判断力のなかったリア王、また王位篡奪者となったマクベス、リチャード3世など。王たちの人としての弱さを、イギリス文学の巨匠はその作品で描いている。

1) *i*は*Independent*紙を簡潔にまとめた日刊紙である。"Prince's 'black spider' memos face secrecy test"
2014年11月25日 p.5.

しかしながら、ここで取り上げるのはシェイクスピアの登場人物ではない。アイルランド生まれの劇作家で、特にその諷刺で知られた劇作家G.B.ショー（George Bernard Shaw, 1856-1950）のマグナス王である。ときの内閣を相手に自分の言論を守るため、孤立無援の状況で、言いかえるならば、いかにしたたかに閣僚たちを論破したかをテーマにした作品、*The Apple Cart*（1928年執筆、29年上演）に登場する国王である。民主主義、言論の自由などの重いテーマをこの作品で、70歳を超えたショーは軽やかに扱っている。このマグナス王について、1929年の世界恐慌前の社会状況と合わせて一考したい。

2. マグナス王の手腕

マグナス王はプロテウス首相と閣僚たちから、内閣の方針に反するような発言を国王がしないという最後通告にサインすることを求められている。プロテウスは言う。

If we are to carry on your government we cannot have you making speeches that express your own opinions and not ours. We cannot have you implying that everything that is of any value in our legislation is your doing and not ours. We cannot have you telling people that their only safeguard against the political encroachments of big business whilst we are doing nothing but bungling and squabbling is your power of veto. It has got to stop, once for all.²⁾

内閣の決定に異議があったとしても国王は腹の内におさめて口に出してはならない。また国家が危い瀬戸際に立たされても注意勧告をだすのは、そのことに気づいた王の役目ではなく、内閣の仕事であるからと重ねてマグナスは説得される。

プロテウスはマグナスに、憲法を順守する王よりさらにすすめた形の、黙っている王（“A dumb king.”）、また秘密裡に新聞に対して工作をするようなことはやめるように（“The working of the Press from the palace back stairs must cease.” p. 317）と勧告し、この内閣の方針に逆らうようなときは、国王の道徳上のスキャンダルを公にして対抗すると脅しをかける。国王はサインをする決定を夕方まで引き延ばし、内閣対国王の対決は一旦水入りとなる。

王妃とのお茶の時間の前に、マグナス王は愛人のオリンシアのもとを訪れる。彼女は自分こそが王妃にふさわしいと、はっきり自分の意見を言う女性として描かれている。マグナスが彼女に惹か

2) Shaw の作品からの引用はすべて次の版による。以後、引用末尾の（ ）内にページ数を示す。

Laurence, Dan H. (ed.) [1973], *The Bodley Head Bernard Shaw Collected Plays with their Prefaces*, Vol. VI, London : Max Reinhardt The Bodley Head, pp. 306-07.

れている様子は国王の秘書たちの目にも明らかである。お茶の場面では、妻と夫（女性と男性）という関係ではなく、王妃という立場の人とともにお茶を飲む国王マグナスが描かれる。その最中にアメリカの大使が到着し重大ニュースをもたらすが、これについては後段で触れる。

夕方になって、ふたたび閣僚たちが国王のもとを訪れ、最後通牒にサインするよう、マグナスに迫る。そのとき国王は、立憲君主制を守るために自らは退位し、皇太子に後を継がせることを宣言する。もはやマグナスが、国王として自らの自由意思を振り回すこともないと閣僚たちは安堵の色を示すが、マグナスの話はこれで終わりではない。ここからが将来の計画であると国王は告げる。

MAGNUS. My last act of royal authority will be to divest myself of all titles and dignities; so that I may step down at once into the position of a commoner. ...The game is, of course, that when I come back into politics I shall be in a better position as a commoner than as a peer. I shall seek a parliamentary seat.

PROTEUS. You in the House of Commons!

MAGNUS. [blandly] It is my intention to offer myself to the Royal Borough of Windsor as a candidate at the forthcoming General Election. (p.370)

国王の位を捨て、貴族としての肩書と特権を捨て平民になってまで、マグナスがあくまでも守ろうとしたものは、自由意思に基づく彼の言論である。総選挙にウィンザー区から立候補すれば、知名度抜群、当選は間違いなく、そうなれば下院を舞台に公の場で徹底的にプロテウスたちと言論を戦わせることも可能となる。またあわよくば、内閣の首班に指名されることも夢ではないのだ。プロテウスは国王にサインの紙を渡すように言う。

PROTEUS. [rising and speaking slowly, with his brows deeply knitted] Has Your Majesty got that ultimatum on you?

MAGNUS. [produces it from his breast pocket and presents it to him]!

PROTEUS. [with measured emphasis, after tearing the paper up into four pieces at two deliberate strokes, and throwing the pieces away] There is not going to be any abdication. There is not going to be any general election. There is not going to be any ultimatum. We go on as before. The crisis is a washout. [To the King, with deadly concentration] I will never forgive you for this. (p. 372)

この戯曲の題名、*The Apple Cart*は、ひとの計画、思惑をひっくり返すという英語の成句、to upset the (one's) apple cart からとられている。首相は自分で最後通牒を破り捨て、国王マグナスは

孤立無援の中、厳しい状況を戦い抜いて閣僚たちの計画をひっくり返し、自らの言論と王位を守ることができたのである。

先に国王の愛人オリンシアについて触れたが、彼女はショーが『人と超人』(*Man and Superman*, 1903)の中で描いた、生の力 (Life-Force) を体現する人物であると言える。彼女は自分こそが王妃にふさわしいとマグナスに公言して憚らない。国王も確かにオリンシアに惹かれていて、王宮の中で彼らの親密ぶりは公然の秘密となっている。しかし、どれほどオリンシアが国王にせがんだとしても、彼女はマグナスにとっては気晴らし相手の存在でしかない。マグナスはオリンシアに言う。

Do not let us fall into the common mistake of expecting to become one flesh and one spirit. Every star has its own orbit; and between it and its nearest neighbor there is not only a powerful attraction but an infinite distance. When the attraction becomes stronger than the distance the two do not embrace: they crash together in ruin. We two also have our orbits, and must keep an infinite distance between us to avoid a disastrous collision. Keeping our distance is the whole secret of good manners; and without good manners human society is intolerable and impossible. (pp. 346-47)

王妃と愛人との間の一線を変更する考えはマグナスにはない。ここで言われる礼儀作法こそ、宮廷におけるマナーであり、これ故にマグナスは王妃とその男友達との関係にも気づかぬふりをして

いる。閣僚たちとの確執、また家庭内における王妃 (妻) との関係など、ストレスに身をさらしているマグナスには人間としての弱さもあるが、閣僚たちを論破する王としての毅然とした風貌を観客は印象づけられる。

退位、国王の恋愛スキャンダルという、シンプソン夫人 (Wallis Simpson, 1896-1986) のことが思い浮かべられるかもしれない。彼女との愛をつらぬくため平民となる覚悟で、イギリス国王 (Edward VIII, 1894-1972) とインド皇帝の座を捨てたウィンザー公 (The Prince Edward, Duke of Windsor) の一件はこの戯曲発表の数年後のことであり、この作品に対する直接的な影響関係はない。

3. 民主主義とは

マグナス王は閣僚たちとの意見の応酬の中で、デモクラシー、また政治 (まつりごと) の苦勞について以下のように述べている。

I am far more subject to public opinion than you [Proteus], because, thanks to the general belief in

democracy, you can always pretend that what you do is done by the will of the people, who, God knows, never dreamt of it, and would not have understood it if they had; whereas, for what a king does, he, and he alone, is held responsible. (p. 319)

How am I to defend myself? You are many: I oppose you single-handed. ... They are richer than ever, more powerful than ever, more able and better educated than ever. But not one of them will touch this drudgery of government, this public work that never ends because we cannot finish one job without creating ten fresh ones. We get no thanks for it because ninety-nine hundredths of it is unknown to the people, and the remaining hundredth is resented by them as an invasion of their liberty or an increase in their taxation. (pp. 323-24)

国のことを責任をもって憂っているのは国王としての自分であって、政治の苦勞など一般庶民にはわかりもしないという自己礼賛的なうぬぼれがマグナスにあることは否定できない。

この戯曲は1928年に執筆され、29年の6月に初演された。当時のイギリスは1924年に労働党による内閣（James Ramsay MacDonald首相）が初めてつくられたが、短期間に終わり、保守党が再び政権についた（Stanley Baldwin第二次内閣）。その後1929年6月にマグドナルドが再び政権を取り戻すという状況下にあった。この戯曲の中で、新しく大臣に指名されたポーアナジーズは労働階級の選挙民について次のように述べている。

I talk democracy to these men and women. I tell them that they have the vote, and that theirs is the kingdom and the power and the glory. I say to them “You are the supreme: exercise your power.” They say, “That’s right : tell us what to do”; and I tell them. I say “Exercise your vote intelligently by voting for me.” And they do. That’s democracy ; and a splendid thing it is too for putting the right men in the right place. (p. 295)

デモクラシーといいながら、誰のための民主主義なのか？閣僚の一人、クラッサス（植民地担当大臣）の親族会社との利害関係も暴かれ、政財界の癒着という問題も論戦の中で指摘される。

一方で閣僚の中には女性大臣（アマンダやライシストレイタ）も含まれている。イギリスにおいては1918年と28年に選挙法が改正され、女性に選挙権が拡大する。ショーは国王の愛人である、オリンシアに二人の女性大臣たちのことを揶揄させているが、一方で女性が今後、もっと政界に進出していくであろう姿を描いていたともいえる。

第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期、パクス・ブリタニカからパクス・アメリカーナへと

次第にイギリス（スターリング圏）の覇権は衰退していく³⁾。作品の中で、駐英アメリカ大使がマグナス国王夫妻のお茶の時間に、謁見許可なく突如、訪問してくる場面がある。もちろん史実とは異なるが、大使はアメリカがその独立宣言を取り消して、大英帝国に再加盟することを決定し、マグナスを皇帝にというニュースを持ってきたのである。マグナスは例の最後通牒へのサイン問題が片づいていないこともあって、この件についてはこの段階では消極的な反応を示す。デモクラシーの国、アメリカは立憲君主制にノスタルジー、憧れを抱いたのであろうか？

4. おわりに

作者のショーは、この戯曲につけた序文（1930）の中で民主主義について次のように述べている。

Every citizen cannot be a ruler any more than every boy can be an engine driver or a pirate king. A nation of prime ministers or dictators is as absurd as an army of field marshals. Government by the people is not and never can be a reality: it is only a cry by which demagogues humbug us into voting for them. ... (p.260)

Democracy, then, cannot be government by the people: it can only be government by consent of the governed. Unfortunately, when democratic statesmen propose to govern us by our own consent, they find that we dont [sic] want to be governed at all, and that we regard rates and taxes and rents and death duties as intolerable burdens. (p.263)

ショーはフェイビアン・ソサイエティ（the Fabian Society）のメンバーでもあり、労働党もこの社会主義的な価値観を共有していた。第一次世界大戦は特にヨーロッパに深い失望感を与え、失われた世代と呼ばれる文学者たちや、ダダイズム、シュールレアリズムなどが生まれた。70歳代になったショーが、民主主義、資本主義に対して、このままでよいのかという真摯な疑問を投げかけているのがこの作品と言えるのかもしれない。ショーの本音はもちろん真摯であったと思われるが、この戯曲の副題は、“A Political Extravaganza”である。諷刺家であったショーがエンターテインメントとして、観客に演劇を楽しんでもらいながらも、片方の手で苦い薬を差し出しているのだ。

イギリスにおいて劇作品への検閲は1968年まで続く。確かに、当時のイギリスは言論を統一するような独裁政権ではなかった。ショーはその自由な言論によって、改めてデモクラシーについて鋭い問いを投げかけたのである。国王、マグナスは言う。

3) Cf. 秋田茂[2012], 『イギリス帝国の歴史—アジアから考える』, 中央公論新社. p.204.

I have to rule over more religious sects than I can count. To rule them impartially I must not belong to any of them; and they all regard people who do not belong to them as atheists. (p.315)

But I am too old fashioned. This is a farce that younger men must finish. (p.374)

デモクラシーは与えられるもの、不変なものではないのかもしれない。それぞれの世代が真摯に向き合っていかなければ失われてしまう脆さもあるのかもしれない。ショーが国王マグナスの最後の言葉に込めたように、未来の世代に対してもこの問いは突き付けられている。

多様な価値観の時代において、いかに議論が白熱しようとも、自由な言論によってのみデモクラシーは鍛えられ続け存在し続けるのである。今後さらに、ショーの政治的な問題を扱った作品と合わせて、考察を続けていきたい。